らあまりにはっきりとあらわれ出ており，讃美歌集として無条件に，心おきなくすいせんするわけにはゆきません。凡てのこれらアジア讃美歌に公平な試練が与えられ，これらの多くが発展しつつあるエキュメニカル讃美歌の一部となり，凡てのキリスト教徒によって歌われる事は望ましい事であります。E. A. C. C. 讃美歌に採用された新しい多くの讃美歌が，それらの発生した国の言葉に翻訳されその生れ故郷の国の教会で歌われることが又望まれる次第である。そして音楽として私は凡ての音楽上にふさわしくないところが讃美歌集から最終的にお払箱になる事を望みたい。（デヴイッド・ラーソン）

日本基督教団讃美歌委員会，Hymns of the Church, 東京，
日本基督教団出版部，1963, 231pp.

1954年に讃美歌の現行版が出されてから，日本における讃美歌研究の分野においてはほとんど見るべき活動が見られなかったが，近年に至り，日本讃美歌学会の結成，その機関誌「さんび」による研究の発表等が示されるようになり，またルーテル教会の歌集編纂，日本基督教団讃美歌委員会の讃美歌第2編編纂のための準備研究の開始等種なる讃美歌に関する動きが見られるようになったことは，日本の讃美歌学の推進のため喜ぶべきことである。こうした動きに先き駆けて出たのが日本基督教団讃美歌委員会が刊行した英語讃美歌集 Hymns of the Church である。

この英語讃美歌集は，日本の教会でも使用されてもいいが，主としてそれ以外の学校，キリスト者の家庭，外国宣教師やその他の英語を使用する人たち，また日本で開催される国際的会合に参加する人々などの使用をめざして編纂されたものである（本書の Preface参照）。神戸女学院大学の David Larson 教授と東京神学大学の John Hesselink 講師が主として編纂に当り，Larson博士が音楽の面，Hesselink 博士が歌詞の面を担当せられたようである。

収載された歌数は209で，日本の現行讃美歌の$\frac{1}{3}$ほどの分量しかないが，内容的にはなかなか厳選されており，従来よく歌われていたものでも，信仰的，文学的，音楽的それぞれの標準にてらして価値の低いものと思われるものは容赦なく排除されている。そのかわり近年欧米において発掘せられたすぐれた内容をもつドイツ語やラテン語の讃美歌，時代にふさわしい信仰を歌った現代の讃美歌作者の作品などは大胆に採用されている。

全体の編纂にも使用者に対して親切な配慮が払われており，特に巻末に聖句，題目，作詞者，作曲者，歌曲の韻律，曲名，初行と7種の索引が付けられていることは使用に際して大きな便宜を与える。なお欲を言えば，作詞者と作曲者の索引に，現行讃美歌の索引にあるように生存年代を付けて貰いたかった。これは讃美歌の研究に当ってなかなか役に立つものである。

なお，聖句索引は現行讃美歌の聖句索引（別刷・讃美歌には添付されていない）にくらべるとずっと分量が多い。歌数は$\frac{1}{3}$であるのに聖句の数は同数か，より多く示されている。詩篇から107（現行讃美歌では112），マタイ福音書は48（現行讃美歌は36），ヨハネ福音書は74（現行では55）というぐあいである。各歌に表示された引照聖句がただ1箇所のみでなく，多くの場合4箇所，中には6箇所（118，120）の聖句が示されているのすらある。

説明によると1箇所だけしか示されていない歌はその箇所の敷延歌 Paraphrase であるとのことである。歌詞を入念に検討してその歌句の基ずく聖句を探し求めてある訳であって，非常に手のかかる作業を必要としたであろうが，説教者，礼拝指導者には役に立つ親切な処置であると言わねばならない。

Larson 博士によって書かれた巻頭の Preface はこの讃美歌の歴史的背景を語り，刊行の趣旨を示しているが，それとともに編纂の方針としたところを列挙している。方針の主要なものは下記の6点である。(1)主要な教会伝統に従い世界教会的（エキュメニカル）であること，(2)聖書の教説に従うものであること，(3)人間中心でなく神を目指すものであること，(4)時代的適当性を有するものであること，(5)文学的優秀性を欠いてはならないこと，(6)その音楽においてすぐれたものでなければならぬこと。これらは一般によい讃美歌集の必要条件と考えうるべきもので，あってそこに附加されている説明とともに，讃美歌研究者によき示唆を与える文章であると言えよう。

この讃美歌集の特色のひとつは，日本人の作った讃美歌が適当な英語の訳詞が附せられて掲載されていることである。今までにも日本の讃美歌が英訳されてアメリカの讃美歌集に掲載されているものもあったが，今回のように10篇もまとめて発表されるのはこの讃美歌集がはじめであろう。いくら日本の讃美歌が発達したと言っても，こうした英米の教会が受入れられる形で提供せられねば，その真価を認識して貰えないであろう。英訳された歌詞の適否については英米の讃美歌学者たちの評価をまたねばならないが，ともかくこうした形で広い世界に向って日本の讃美歌の存在が示されるようになったことははなはだ有意義なことと言わねばならない。

この讃美歌集はもっぱら礼拝の使用をめざす標準讃美歌 (standard hymns) の歌集のように見える。編者の表現によれば a complete hymnal in miniature（小型の標準讃美歌集）であって，歌数は多くないけれども英米の標準的な讃美歌集の採用するレベルを維持する小型の礼拝用讃美歌集たらしめようと意図されているようである。(Larson and Hesselink, The Genesis of a New Hymnal, JCQ, July 1963)。こうした厳正な讃美歌学的意図を有する讃美歌集が出現したということは有意義なことであって，今後の日本の讃美歌改訂事業によき示唆を与えることになるであろう。

しかし，日本における英語讃美歌の実際的使用という面から見て問題となることもあるように思う。日本において英語讃美歌集が使用せられるのは必ずしも礼拝のみに限らない。編集者が期待しているように学校や家庭等における巾の広い使用のためであるとすれば，礼拝用讃美歌だけに限らず，もっと多様性をもつ英語のうた（もちろん宗教的のもの）を含めた方がよかったのではないか。たとえば黒人霊歌 (negro spirituals) などは，編者の掲げる原則から言えば標準的讃美歌集に入れるには不適当であるかも知れないが，礼拝以外の場合でも使用するというのであれば，採用しても差支えないのではなかろうか。この讃美歌集の作製に当って参考にしている点が多いように思われる Pilgrim Hymnal, 1958 は礼拝使用を目ざすものであるにかかわらず，黒人霊歌を6篇も掲載しているのである。

個々の讃美歌の評価については，実際的使用と，注意深い讃美歌学的検討を必要とする

ので今に差控えたいが，ただひとつ眼についたことを指摘したい。

206番の Turn back, O man, forswear thy foolish ways は願わくば今後なるべくキリスト教讃美歌集から除外してもらいたい。この讃美歌の作者は，多分なお現存していると思われるが，英国の王室文学院の会員で，有名な劇作家である Clifford Bax である。この讃美歌の製作年代は1916年で，この時には作者はまだキリスト教信仰を有していたことと思う。しかし，その後彼は仏教徒になっているということである（Armin Haeussler, The Story of Our Hymns, p. 546）。これは Haeussler が Bax 自身から聞いたことであって間違いないことである。われわれは讃美歌を信仰のうたとしてまごころから歌うのであって，作者がその後キリスト教信仰を棄てたということが分っていては喜んでその讃美歌を歌う気持になれない。「人よ，愚かな道をすてて帰り来れ」と歌っているが，作者は今は，キリスト教信仰を打ちすてるべき「愚かな道」と考えているのではあるまいか。内容においても特にキリスト教信仰が表現されてもいない。今後はこのうたはわれわれの讃美歌集からははぶくようにしたいものである。　（竹内　信）

Roland H. Bainton, The History of Christianity, Nelson. 1964, 432 pp.

著者ローランド・H. ベエイントンは，宗教改革史の研究家としてすでにわが国においてもよく知られ，Here I Stand「われここに立つ」，The Church of Our Fathers「世界教会史物語」，Luthers Christmas Book「クリスマス・ブック」などの訳書もある。先年日本をたずね同志社に1カ年滞在して教鞭をとる計画がたてられ，その実現の一歩手前で夫人が健康を害され中止のやむなきに至った。語学の堪能な教授は，すでにある程度の日本語をマースターしておられた。わたしが1962年の感謝祭の週末に同教授のお宅をおたずねしたおりには，近くネルソン社から出す教会史の著述に冒頭しておられ，キリスト教の美術史から豊かな材料を駆使して，色彩を多く用い，眼でたのしんでみる教会史を書きつづる計画をたのしそうに語っておられた。わたしは，本書を手にして，著者の長い間の念願が豊かに成就したことを思った。

本書は，1. 背景，2. キリストの職務，3. 異教社会における教会，4. ローマ帝国におけるキリスト教，5. 異教徒たちの改宗，6. 秩序の探索，7. 中世のキリスト教世界，8. 教皇庁の衰退，9. 宗教改革，10. 宗教戦争，11啓蒙の世紀，12. 近代におけるキリスト教の12章から成り，2千年の教会史のパノラマをたどるおもいがする。本書の顕著な特色は，約450点にのぼるキリスト教芸術から美くしい写真が解説と共に引用されてあり，教会史のみでなく，キリスト教美術の観点からいっても豊富な材料を提供している書物である。

いささか不満な点をあげるなら，キリスト教の歴史を書くにあたって西欧のキリスト教が中心となっており，アジア，アフリカ，南米などにおける宣教活動やそれらの地域における教会の形成についてほとんどふれられていない点である。また1910年いらいのエキュメニカル運動にもあまり触れられていない。これらは，紙数の制限上やむを得なかったことかも知れないが，キリスト教の歴史を世界史的な観点からえがくとするならば，さびしいことである。とまれ，熟練した大家による美くしい眼でみる教会史として，本書はきわだった光をそなえていることにはかわりない。　（竹中　正夫）